

「被爆72周年 2017平和行動 in 広島・長崎北海道統一代表団」を派遣

原子爆弾が投下されて72年目を迎える中、連合北海道・原水禁北海道・北海道友愛KAKKINは8月4日～9日の日程で、のべ94名を「北海道統一代表団」として広島・長崎に派遣した。



8月5日の平和ヒロシマ集会で主催者挨拶にたった連合本部逢見直人事務局長は、まず今年7月7日に史上初めて法的に核兵器を禁止することを目的とした核兵器禁止条約が国連で採択されたことについてふれ「連合は全ての核兵器の廃絶を求める立場から本条約の採択を歓迎する。しかし、日本政府は国際社会の分断を一層深めるとして交渉会議にも参加せず条約の制定に反対している。これ以上核兵器の廃絶を求め



る多くの国や市民に背を向けることは許されない。」とし政府の対応を批判。「9月から国連加盟国による条約署名が開始される予定だが、核兵器保有国と非保有国との橋渡し役としての責任を果たすべく勇気を持って条約の批准を進めるとともに、速やかな発効に向け各国に働きかけることを強く要請する。」と述べた。また2020年に開催予定の核兵器拡散防止条約NPT再検討会議について、2015年の際に核兵器保有国と非保有国との対立により合意に至らず今後のNPT体制自体をも揺るがしかねない極めて残念な結果になった経過を踏まえ、「これまで続けてきた取り組みが必ず実を結ぶよう、より一層の運動の強化と国民世論の形成に向けて行政や関係諸団体に対して行動への参加協力を幅広く呼びかけていく。」とした。さらに北朝鮮が昨年から今年にかけて核実験や弾道ミサイルの発射実験を繰り返していることについてもふれ「連合が求める北東アジアの非核化に逆行し世界平和に対する重大な挑戦と受け止めている。連合は北朝鮮に対し核実験や弾道ミサイル計画に関する全ての行動の停止と国連安全保障理事会決議の完全履行を強く求めるとともに日本政府と国際社会に対し一刻も早く北朝鮮との直接対話による危機回避の道を開くよう外交努力を要請する。」と述べた。

「被爆者の訴え」では、5歳の時に被爆した廣中正樹さんが登壇し、当時の惨状を語り、戦争がない社会の大切さを切に訴えた。



続く、8月8日の平和ナガサキ集会では、連合本部逢見事務局長がヒロシマ集会に続き主催者挨拶にたち「原爆投下からすでに72年が経過し、その脅威を身をもって体験された方々の高齢化が進んでいる。こうした現状を踏まえ、連合は若い世代を対象に戦争の歴史や知識、語り部の皆さんの思いを継承することを目的に様々な取り組みを展開している。世界の核軍縮を進めるための世論形成において、唯一の核兵器被爆国日本が果たすべき役割は極めて大きい。

その中でも、私たち労働組合が国際的な運動を牽引していかなければならない。皆さんが学んだことを地域や職場に持ち帰り必ず運動として展開してほしい。」と訴えた。

続いて、「若者からのメッセージ」として、第20代高校生平和大使22名が紹介された。連合北海道と退職者連合で構成する北海道高校生平和大使派遣実行委員会で選出した、尾崎天音さんと鈴木結理さんも仲間とともに登壇し、被爆者や戦争体験者の方々から平和のバトンを受け継ぎ世界に広げていく決意を表明した。



また、ピースフラッグリレーとして、連合長崎から連合北海道・根室集会へと平和の思いとともに旗が引き継がれた。旗をしっかりと受け取った連合北海道高倉司副会長は「沖縄・広島、そして今日ご参集の皆さんを始めとする長崎の平和に対する思いのこもったフラッグを引き継いだ。このフラッグを北海道へ持ち帰り、今度は根室集会で道民の熱い思いをこのフラッグに込めていきたい。多くの皆さんに来道していただき、一緒に集会を盛り上げてほしい。」と述べた。



参加者はこれらの集会を通し、戦争の実相、原爆の恐怖を身をもって知る被爆者の言葉の重さを受け止め、平和の実現のため、これを語り継いでいかなければならない責務があることを強く感じた。

統一代表団は広島・長崎においてピース・ウォークに参加するなど、それぞれ学習を深めるとともに、広島では北海道独自企画として原爆死没者慰霊碑への献花を、長崎では被爆地「淵中学校」への墓参を行った。

連合北海道はこれからも核兵器廃絶と世界の恒久平和の実現をめざし、職場や地域における核兵器廃絶運動に粘り強く取り組んでいく。